

少年院出院者との接触場面における心理的距離についての調査研究

西川 絢菜

近年、少年非行においては検挙人員数が減少傾向にある一方で、再非行少年率や再入院率は依然として高い。その背景には、非行・犯罪歴があること自体が就労などの社会的包摂を困難にさせていることがあり、その改善のためには否定的なステレオタイプや偏見を変容させていくことが必要である(上瀬, 2017)。

本研究の目的は、少年院出院者との接触場面において、交流期間の長さにより心理的距離が変化するかを明らかにすることであった。さらに、自分が少年院出院者と接触する場面を想定する場合と、(自分ではない)世間一般の人が同じ場面でどれくらいの抵抗を感じるかを推測する場合で、心理的距離に違いがあるか否かを検討した。

本研究では、①条件(自分/他者)に関わらず、短期から長期の交流関係になるにつれて心理的距離が遠くなる、②自分条件ではそれぞれの場面で、他者条件に比べて心理的距離が遠い、の2つの仮説を立て、質問紙調査を行った。実験計画は、参加者内2要因混合計画であり、独立変数は視点(自分条件・他者条件)と接触場面(短期・中期・長期)、従属変数は少年院出院者に対する心理的距離であった。

分析の結果、仮説1は支持され、条件に関わらず、短期から長期の交流関係になるにつれて心理的距離が遠くなった。また、自分条件ではそれぞれの場面で、他者条件に比べて心理的距離が近くなり、仮説2は支持されなかった。

このことから、長期的な関係を築くに当たって、非行歴があることや少年院を経験していることが周りから受容される上でのハードルとなっていることがうかがえた。また、少年院や非行少年についてのネガティブなイメージや偏見に対して自分自身よりも他者の方が影響を受けやすいと見積もる傾向があるということは、多元的無知として少年院出院者の受容に抵抗が高くなっている可能性が示唆された。

本研究の限界として、参加者の属性の偏りや、心理的距離の自分条件と他者条件を参加者内で測定したことが挙げられる。また、少年院についての知識の多寡によって出院者に対する心理的距離や受容的態度に違いがあるのか検討の余地がある。接触する相手の性別によって心理的距離が変わる可能性(青野, 2003)を考慮すると、今後の検討では接触を想定させる少年院出院者の性別を明示しておく必要もあるだろう。(社会心理学)